

P2-053

舌小帯短縮症の機能障害について

鈴木 亮¹、横塚 裕二²、駒澤 大悟¹、小口 寛子¹、渡部 茂¹¹明海大学 歯学部 形態機能成育学講座 口腔小児科学分野、
²明海大学 歯学部 病態診断治療学講座 口腔顎顔面外科学
第2分野

【緒言】

舌小帯短縮症は最も軽度である望月の分類1度（舌を口腔外に出すことができる）が約70%を占めており、外科的切除が一般に行われている。しかし本症の機能障害についての報告は少なく不明な点が多い。本研究は舌小帯短縮症の機能障害を明らかにすることを目的とし、実験1舌小帯切除術前後の言語評価、実験2舌小帯切除術前後の咀嚼能率ならび筋活動量について比較検討した（明海大学倫理委員会A1216）。

【方法】

実験1:舌小帯短縮症の小児12名を対象に、言語聴覚士とともにイラストカードを使用し、患者に発音させ、音の歪みを確認して、発声中の舌の動きと舌の可動範囲を目視にて確認した。実験2:舌小帯短縮症の小児11名を対象とした。咀嚼能率測定は咀嚼能力測定用グミゼリーの咀嚼後の咬断片を水洗し、35℃の水15mlで10秒間攪拌後、簡易型血糖値測定装置にてグルコース濃度を測定した。各被験者に規定時間20秒間咀嚼させた。咀嚼中の筋活動量測定は、舌骨上筋群にて行った。各測定は、舌小帯切除術前と術後2か月において比較した。

【結果】

実験1:言語評価の結果、非切除群（外科的処置を必要とする所見がない者）8名、定期的言語管理群（言語訓練のみを行った者）3名、切除群（切除術と言語訓練の併用が必要な者）1名に分類された。実験2:20秒間咀嚼時のグルコース濃度を術前と術後2か月で比較したところ、有意に増加したのは2名、有意に減少したのは1名、有意な変化が認められなかったのは8名であった。舌骨上筋群の筋活動量を術前と術後2か月において比較したところ、2名が有意に増加し、1名が有意に減少し、8名は有意な変化が認められなかった。

【考察】

舌小帯短縮症は必ずしも構音障害を併発しておらず、障害を認めても手術せずに言語訓練のみで改善がみられたことから、両者の関連性は低いことが示唆された。切除術前後の咀嚼能率の比較においては一定の傾向が認められなかった。また筋電図測定にて咀嚼中の舌運動を測定した結果、切除術前後での舌骨上筋群筋活動量では、共通の傾向は認められなかった。このことは小帯切除により舌の動きが有利となり、可動範囲の拡大は生じたものの、咀嚼中の舌運動は主に歯列内で行われるため、可動域の上昇は咀嚼能率及び舌骨上筋群筋活動量の顕著な向上に影響してはいなかったことが推測される。

【結論】

望月の分類1度と診断された舌小帯短縮症では、構音障害と咀嚼能率への影響は低いと考えられた。

P2-054

看護師による障害（児）者への口腔ケアの取り組みの現状
—セミナー後のアンケートより—

吉田 美香子、大畑 直子、渡部 茂

明海大学 歯学部 形態機能成育学講座 口腔小児科学分野

【目的】

障害（児）者では本人による口腔衛生管理は難しいことが多い。そのため、施設や病院においては、口腔内環境を良好に維持するため、看護師による介助が非常に重要となる。今回我々は、看護師を対象に口腔ケアについて意識の高さを把握することを目的に、セミナー終了後に口腔ケアの取り組みの現状に関するアンケートを行ったのでその結果について報告する。

【対象と方法】

対象者は口腔ケアセミナーを受講した施設や病院に勤務する看護師39名である。内訳は障害者施設12名、病院27名である。調査内容は、口腔ケアの内容および実施状況、口腔ケアに関する知識、意識を把握するためにアンケートを実施した。アンケートは、無記名自記述式で一部単一選択方式ならびに一部記述式で行い、データは連結不能となるようにした。

【結果】

口腔ケアの実施に関する意識では、口腔ケアの必要性について全ての看護師、1日に必要と思われる口腔ケアの回数は、8割が1日3回以上必要性を感じていた。1名の障害（児）者にかけることが可能な口腔ケアの時間は「5～10分」が半数だった。実施状況では、8割が口腔ケアを行っており、1日3回が半数、実際に要する時間は5分以内が多かった。方法は、全ての看護師が歯ブラシを使用していた。薬剤・洗口剤は、6割で使用されていた。口腔ケアは主として誰が行うべきかの設問では、様々な意見にわかれた。口腔清掃状態と全身の関わりの有無では、全ての看護師が関わりあるとし、今後の口腔ケア実施に対する意向では、97%の看護師が障害（児）者に対する口腔ケアを今後も行っていきたいと回答していた。

【考察】

今回のアンケート結果では、障害（児）者への口腔ケアの必要性を全ての看護師が感じており、本対象者の口腔ケア実施に対する意識は高かった。看護師は、繁雑な日常の業務の中で自ら必要と思われる回数の口腔ケアは難しく、実施可能な時間があれば最大限の時間を使って口腔ケアを行っていることが示唆され、口腔ケアに多くの時間を費やせない実情が推測された。今回の結果を十分に踏まえ、今後の口腔ケアセミナーにおいて看護師への極め細かい情報提供が必要であると考えられる。

【文献】

1) 伊多波怜子 他：看護師による入院患者への口腔ケアの取り組みの現状—看護師へのアンケート調査をもとに—、歯科学報，106：267-272，2006。